

「天使は婦人たちに言った。[恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろう] (マタイ 28:5)」。天使の第一声は「恐れるな」。イエスの降誕に際しても、天使は「恐れるな」で語り始めた(マタイ 1:20, 路 1:13, 1:30, 2:10)。

天使の「恐れるな」という言葉は、硬直した心の壁を打ち壊す。

日曜日の明け方、二人のマリアは何のためにイエスの墓へやって来たのか(マタイ 28:1)。彼女らはイエスの教えやふるまいに強く打たれ、己が心の壁を壊してもらった。墓で、真の自由へと導いてくれた方の死を見つめて泣き、悲しみを何とか納めたかったのか。

二人のマリアは、死(十字架につけられたイエス)に生前のおもかげを捜そうとしていた。だから安息日が終わるやいなや、墓へ赴いたのだ。

天使は続けて語りかける。「あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり復活なさった(28:6)」と。あたかも「お前たちが向くべき方向は逆だ」と言わんばかりに。「恐れるな」と告げ、死へのこだわりがこじ開けられ、心の柔らかい所に「復活」が示された。

天使は女たちに、「死の支配」が乗り超えられた様を示し(28:6)、イエスの復活を弟子たちに伝えるよう、念を押して命じた(28:7)。

「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った(28:8)」。「恐れながら大いに喜ぶ」奇妙な感じ、想像できるだろうか。

女たちの理解が、死から「命」に都合よく反転したのではなく、長い衣の裾をたくし上げ、息せき切って走る二人のマリアにおいて刻々と、死と復活がぐるぐる廻り始めた。それが「恐れながら大いに喜ぶ」混沌ではないか。

二人のマリアが「恐れながら大いに喜び」、足をもつれさせて走っていると、「イエスが行く手に立っていて〔おはよう〕と言われた(28:9)」。

原典はごく普通の挨拶言葉、「おはよう」でもいいのだが、幾らか違和感がある。ヘブライ人の挨拶「シャーローム／平安あれ」と訳してはどうだろうか。

走っていく前にいきなり復活したイエスが現れたものだから、「恐れながら喜ぶ」混沌が一気に沸騰した。彼女らは半ばパニック状態になって、「近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した(28:9)」。

イエスは天使と同じ言葉を発する。「恐れることはない(28:10)」。この言葉で恐れは除かれ、女たちの混沌は「喜びの光」に収斂する。

それから、天使の言葉(28:7)に重ねるがごとく、「行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる(28:10)」と命じた。

復活したイエスと最初に出会うのはなぜ女なのか。なぜ兄弟(28:10)である弟子ではないのか。弟子たちは「シャーローム／平安あれ(路 24:36)」とイエスに挨拶されても、「死」の方を向いたまま(24:37)。復活の徴を直接見せられて、かろうじて女たちの地点に近づく(24:41)。

要するに男はいつそう頑迷なため(24:45)、復活は柔軟な女から啓かれる。男の外側には世があり、世の諸力は復活の光を押さえこもうとする(マタイ 28:11~13)。

しかし私たちは、命の光たる復活に(イザヤ 26:19)、確かに与る(ロマ 6:4)。



《おまけのひとこと》

復活は 探し求めて見いだすものではない 混沌に押し出されて走る面前で 復活との邂逅が起る 恐れと喜びがぐるぐる廻る私たちの混沌 走り出す契機もまた キリストからの重力の作用なのか